

都道府県名	青 森 県
-------	-------

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	青森市立筒井南小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	1	19	25
児童数	97	96	102	109	106	109	2	621	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力と豊かな表現力を身につけさせるための学習指導法の研究
算数科を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・算数科

児童の理解度に差が出やすい教科であるため。

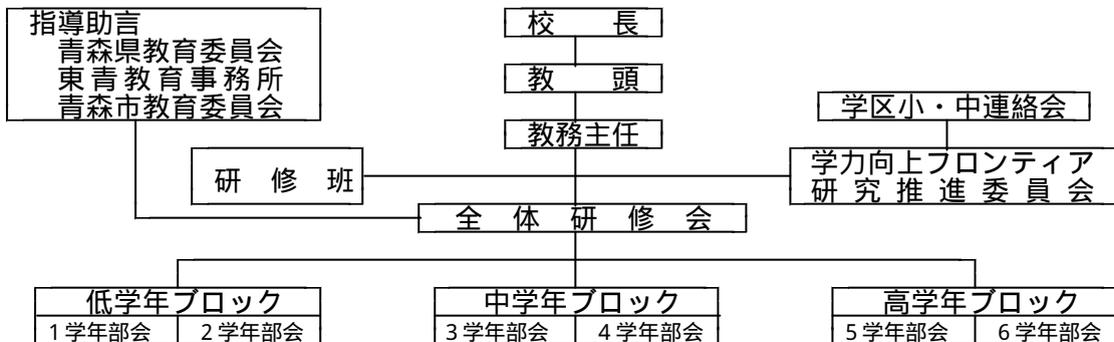
(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 確かな学力と豊かな表現力を身につけさせるための学習指導法の研究 算数科を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して 研究の見通し（仮説） (1) 学習過程における個に応じた指導や体験的な活動のあり方を工夫することにより、自分の力で問題を解決し、基礎的・基本的な内容が定着するのではないか。 (2) 互いの気づきや考えのよさを認め合い、多様な考え方を引き出す支援を工夫することにより、自分の考えを豊かに表現できるのではないか。</p> <p>研究の内容・方法 (1) 個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善 TT、習熟度別、課題別学習、朝の学習(チャレンジタイム)の工夫 個々の実態把握に基づいた、基礎・基本の定着を図るための支援 (2) 体験的学習を通して、見通しをもって自力解決させる単元構成・展開の工夫 日常生活や既習事項との関連を図った課題提示の工夫 問題意識が連続しながら深まっていく単元構成・展開の工夫 学習内容を定着させるための効果的な体験活動の工夫 (3) 互いの気づきやよさを認め合い、進んで自分の考えを表現させる工夫 自分の気づきや考えを分かりやすく表現させる支援 個々のよさを生かしながら、多様な考えを関連づけたり深めさせたりする支援 (4) 中学校との連携による指導の連続性 小・中学校相互の学力分析に基づいた指導の改善</p>
--------	--

	<p>テーマ 確かな学力と豊かな表現力を身につけさせるための学習指導法の研究 算数科を中心とした指導方法・指導体制の工夫改善を通して 研究の見通し（仮説） (1) 学習過程における個に応じた指導や体験的な活動のあり方を工夫することにより、自分の力で問題を解決し、基礎的・基本的な内容が定着するのではないか。 (2) 互いの気づきや考えのよさを認め合い、多様な考え方を引き出す支援</p>
--	---

平成 16 年度	<p>を工夫することにより、自分の考えを豊かに表現できるのではないか。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 個に応じた指導方法・指導体制の工夫改善 T T、習熟度別、課題別学習、朝の学習(チャレンジタイム)の工夫 個々の実態把握に基づいた、基礎・基本の定着を図るための支援 発展的学習や補充的学習の進め方の工夫</p> <p>(2) 体験的学習を通して、見通しをもって自力解決させる単元構成・展開 の工夫 日常生活や既習事項との関連を図った課題提示の工夫 問題意識が連続しながら深まっていく単元構成・展開の工夫 学習内容を定着させるための効果的な体験活動の工夫</p> <p>(3) 互いの気づきやよさを認め合い、進んで自分の考えを表現させる工夫 自分の気づきや考えを分かりやすく表現させる支援 個々のよさを生かしながら、多様な考えを関連づけたり深めさせたり する支援 学びのよさや可能性を見取り、次への意欲を高める評価</p> <p>(4) 中学校との連携による指導の連続性 小・中学校相互の学力分析に基づいた指導の改善</p>
----------------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

(1) T Tの指導について

第6学年 算数科学習指導案

- 1 単元名 「比とその利用」 比を使った問題
- 2 単元の目標
 - (1) 2つの数量を表すのに比を用いることのよさが分かり、日常生活の場面で進んで用いようとする。 [関心・意欲・態度]
 - (2) 比の性質を用いて、比例式の未知数を求めたり与えられた量を示された比に分けたりする方法を考え、解決することができる。 [数学的な考え方]
 - (3) 比を用いて表したり、等しい比を見つけたりすることができる。 [表現・処理]
 - (4) 比の意味や表し方、比の相当などについて理解する。 [知識・理解]
- 3 単元について
 - (1) 学習指導要領との関連
本単元は学習指導要領6学年「D 数量関係」(1)
(1) 簡単な場合について、比の意味を理解できるようにする。
に基づき、設定されている。
 - (2) 指導にあたって
2つの数量AとBの割合を表すには、大きく分けて2つの方法がある。
その1つは、A、Bのうち的一方を基準として、“AはBの「4倍」とか、「3/5」という場合である。この場合、AとBの割合は1つの数で表される。
もう1つは、特にどちらか一方を基準とするのではなく、2つの数量の共通な量を基準にして“AとBは3対5の割合である”というように、簡単な整数の組み合わせで表す方法である。
前者については、低学年から広い範囲で指導を重ねてきており、第5学年では、1つの量を基準として他の量の割合を考える学習もしてきている。
本単元では、後者の場合、つまりAとBが対等に扱われる場合について、「比」

という割合の表し方を知り、その相当関係を理解した上で、数量の関係を表したり処理したりするのにこの方法を必要に応じて用いる能力を伸ばしていくことが主なねらいである。

このような比を使った考え方は、日常のいろいろな場面で用いられる。そこで、児童が意欲をもちそれが持続するような課題提示の工夫をしたり、既習との関連を明らかにして学習を進めたりすることにより、積極的に課題解決に取り組むとともに、学習したことを生活のいろいろな場面で活用する態度を育てていきたいと考える。

4 児童の実態について

【対象人数 37名】

観 点	調査問題と結果	考 察
2つの数の公約数を見つけることができる。	40と32の公約数をすべてかきましょう。 【正答】…(46%) 誤答例 ・2, 4, 8(12名) ・1, 2, 8	等しい比を見つけていく場合、困難な児童が出てくると思われる。小単元の「等しい比」では、約数を想起させ、確実に等しい比を求めることができるよう丁寧に指導していきたい。
割合に関する問題を解くことができる。 …整数倍の割合 …小数倍の割合 …比べる量を求める …もとにする量を求める	ソフトボール部の定員は20人です。希望者が40人いました。希望者は定員の何倍でしょう。 【正答】…式(89%) 答え(84%) 誤答例 ・ $20 \div 40$ (3人) サッカー部員の定員は15人です。希望者が45人いました。希望者は定員の何倍でしょう。 【正答】…式(97%) 答え(84%) 誤答例 ・ $25 \div 45$ 書道クラブの定員は15人です。希望者はその0.8倍あったそうです。希望者は何人だったのでしょうか。 【正答】…式(96%) 答え(96%) 誤答例 ・ 0.8×15 科学クラブ希望者は24人でした。これは定員の1.6倍にあたります。科学クラブの定員は何人でしょう。 【正答】…式(62%) 答え(62%) 誤答例 ・ 24×1.6 (12人)	割合を求めるための立式は大方できているが、少し数値が複雑になると、計算違いをするという傾向が見られる。考え方はもちろんであるが、普段から計算力を高めるための繰り返し練習をしていかなければならない。 比べる量を求める問題はほとんどの児童が正答を得ている。何の何倍という学習が低学年から繰り返し指導されていることと、その場面がイメージ的に捉えやすいことが理由としてあげられる。本時の課題でも、割合(比の値)を使った解決方法が出てくるものと思われる。 小数倍の割合のもとにする量を求めるのに困難を感じている児童が多い。
本時に関わる問題を解くことができる。	5gの水と2gの食塩で食塩水を作りました。これと同じ食塩水を作るために水を150gにしたとき、食塩を何g入れればよいでしょう。 【正答】…式(49%) 答え(49%) 正答例 ・ $150 \div 5 = 30$ ・ $2 \times 30 = 60$ (11人) ・ $150 \div 5 = 30$ ・ $30 \times 2 = 60$ (5人)	本時でも、等しい比を使って解決する児童が多いと思われる。 比の1にあたる量を求め、その何倍という見方も線分図等を通して理解できるようにしていきたい。 比の値は取り立てて指導することにはなっていないが、5の2に対する割合を用いた考え方にもふれていきたい。

- 5 指導計画 【省略】
 6 本单元における評価規準 【省略】
 7 本時の指導 (1 / 3)

(1) ねらい 線分図に表して比の1にあたる量に着目したり、等しい比の性質を使ったりすることにより、2つの量の比から比べる量やもとにする量を求めることができる。

(2) 仮説との関連
 仮説1について

学習過程における個に応じた指導や体験的な活動のあり方を工夫することにより、自分の力で問題を解決し、基礎的・基本的な内容が定着するのではないか。

- ・ 課題を文章や数値だけで提示するのではなく、実際に具体物を用いてその場面を演示することにより、題意を的確に捉えさせ解決の見通しをもたせていきたい。
- ・ T1、T2の役割を明確にし、効率的に個に応じた支援をしていきたい。そこで、自力解決の場面では、全体での見通しを話し合って解決できる児童には、T1が解決の状況を見取りながら支援し、練り上げの計画を立てていくことにする。また、自力解決が進まない児童には、T2が別のコーナーで具体物を操作させたり、ヒントカード(比と量を面積図に表したものや等しい比の式に表したものを)を個人的に選択させながら支援していくことにする。そして、確実に最低でも1通りの考え方で解決できるようにしていきたい。

仮説2について

互いの気づきや考えのよさを認め合い、多様な考え方を引き出す支援を工夫することにより、自分の考えを豊かに表現することができるのではないか。

- ・ 自力解決時の支援により、どの児童でも課題を解決した上で話し合いに臨ませたい。そうすることにより、その児童なりにより理解を深めることができると考える。また、線分図や式と対応させて説明させたり、考え方の異同に着目させることにより、効率的に話し合いを進めていきたい。

(3) 展開

主な学習活動()と反応(・)	支援 留意点	評価 仮説との関連
1 課題を読みましよう。 課題を読む。 ざるそばを食べるためにそばつゆを作ります。 水とつゆの素の量の比を5 : 2 にします。 つゆの素を60mlにすると水は何mlになるでしょう。	T1 全体を対象に課題を提示し、問題を把握させていく。	仮説1 そばつゆを作る場面を演示し、題意を把握させるとともに解決の見通しをもたせる。
2 水の量はどれくらいになるでしょう。 ・200mlくらいかな。 ・100mlはこえるだろう。 ・水の量の方が多くなるよ。	2つの量の比から、結果の見通しをもたせる	
3 どうして水の量の方が多くなるのでしょうか。 ・自分で作る時に水の方を多く入れるから。 ・5 : 2という比だから、比が5の水の方が多くなるはずだ	比に着目させ、水の量の方が多くなるという根拠を明らかにする。	
4 学習問題を決めましよう。 比を使って水の量の求め方を考えよう。		
5 どうしたら水の量が求められそうですか。 解決の見通しを発表する。 ・等しい比を考えればいい。 ・60mlで比が2だから、1だと何mlになるかを考えればいい。 ・水の量がつゆの素の何倍かを考えればいい。		比を使って解決すればいいということが分かり、解決の見通しをもつことができたか。(挙手、発表)
6 自分なりの考え方で水の量を求めてましよう。		

自力解決をする。

$$\times 12$$

$$5 : 2 = 60 : \quad$$

$$\times 12$$

$$60 \div 5 = 12 \quad 2 \times 12 = 24$$

$$A . 24 \text{ ml}$$

等しい比を考えて求める。

$$\times 30$$

$$5 : 2 = \quad : 60$$

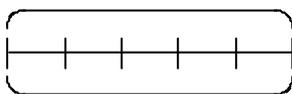
$$\times 30$$

$$60 \div 2 = 30 \quad 5 \times 30 = 150$$

$$A . 150 \text{ ml}$$

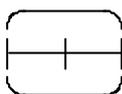
比の1にあたる量を考えて求める。

$$5$$



ml

$$2$$



$$60 \div 2 = 30$$

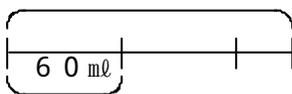
$$30 \times 5 = 150$$

$$A . 150 \text{ ml}$$

$$60 \text{ ml}$$

水の量はつゆの素の何倍かを考えて求める。

$$2 . 5$$



$$1$$

$$5 \div 2 = 2.5 \quad 60 \times 2.5 = 150$$

$$A . 150 \text{ ml}$$

7 それぞれの考え方で、よいところや似ているところを発表しましょう。

それぞれの考え方を比較検討する。

- ・ は等しい比考えていて、前に勉強した内容を使っている
- ・ は線分図を使うと、比の1にあたる量がはっきりと分かるので考えやすいし、次の課題を解くときにも使えそう
- ・ は水の量がつゆの素の何倍かを出してから比べる量を求めていて、比は割合の問題と同じだということが分かった

8 今日の勉強をまとめましょう。

比を使って水の量を求めるには、

- ・ 等しい比
- ・ 比の1にあたる量
- ・ 何倍かという割合を考えて求めればよい。

T 2

解決の見通しがもてない児童には、どのようなヒントカードがあるか知らせる。

T 2

全く見通しのもてない児童には、課題にそって具体物を操作させながら、個別指導、小集団指導をする。

T 1

の児童には、比の表し方を振り返らせたり結果の見積もりを想起させ、修正させていく。

T 1

自力で解決している児童の状況を見取るとともに、机間指導をしながら指名計画を立てる

T 1

解決してしまった児童には、自分の考え方が妥当であるかを振り返らせたり、説明の仕方を考えさせたりする。

T 1

指名計画をもとに、全体的話し合いを進めていく。

T 2

つばやきを拾い上げる

は30倍の30、は30mlの30であることを、線分図や面積図、関係を表す式をもとに捉えさせ、整理していく。

仮説1

解決が進まない児童には、いろいろなヒントカードや具体物があるコーナーに行き、自分が必要とするものを自由に選択し、解決できるようにする。

評価A

自分の解決方法を分かりやすくノートにまとめ、説明することができる。

評価B

いずれかの方法で解決することができる。

仮説2

自分の解き方がどの考え方に基づいているのかを、話し合いを通してしっかりと理解させたい。

また、線分図や面積図と式を対応させながら説明することが、視覚的にも捉えやすく効果的な方法であることを実感させたい。

<p>9 今日勉強したことを使って、次の課題を解いてみましょう。自分がよいと思った考え方で類題を解く。 比と水の量からつゆの素の量を求める。 比と横の長さから長方形の縦の長さを求める。 比と縦の長さから長方形の横の長さを求める。</p>	<p>T1、T2 机間指導をし、解決の状況を見取るとともに解決が進まない児童に個別指導をする。</p> <p>全員が を解決した時点で、確かめをする。</p>	<p>評価A 自分の決めた方法で類題を解き進めることができる。</p> <p>評価B 自分の決めた解き方で、類題を解くことができる。</p>
--	---	--

ア 児童の学習状況をよりの確に把握できるとともに、ヒントカードや具体物の操作等によって個別指導をすることができ、個に応じた指導の充実が図られた。

イ 単元終了後に、「じっくりコース」(基本)と「すいすいコース」(発展)に分かれて発展的な学習や補充的な学習の場を設定することにより、それぞれの児童の理解の程度に応じた習熟を図ることができた。

(2) 少人数指導(習熟度別学習)について

少人数指導(習熟度別学習)後のアンケート結果

- 1 指導単元 「分数のわり算」(7時間)
- 2 コースの種類 「じっくりコース」(基本)と「トライコース」(発展)の2コース
- 3 コース決定と方法 今までの学習状況を振り返って(テスト等)、児童自ら選択する。学級を2つのコースに分け、従来の時間割通りとする。児童の実態をよく把握している学級担任が「じっくりコース」を担当し、加配教諭は「トライコース」を担当する。児童の実態に応じて、教師と相談した上で途中でのコース変更をしてもよいこととする。そのため、進度面では2つのコースともそろえておく。

4 コース選択の実際

	1 組	2 組	3 組	合計
じっくりコース	19名	20名	19名	58名
トライコース	18名	16名	14名	48名

5 アンケート結果

Q1. コースに分かれて勉強することを、あなたはどう思いましたか。

	%
とてもよい。	63
よい。	33
あまりよくない。	2
よくない。	2

Q2. 「とてもよい」、「よい」と答えた人はどんな理由からですか。(複数回答可)

	%
少ない人数で勉強するのは楽しい。	65
発表する回数が増える。	52
分からないとき、すぐに教えてもらえる。	49
分からないことを質問しやすい。	40
勉強が分かりやすい。	73
自分に合った勉強ができる。	68
集中して勉強ができる。	72

その他の理由

- ・自分が納得のいくまで教えてもらったから、きちんと覚えられた。
- ・レベルが同じ人どうしでやると、自分でも能率よく勉強できる。
- ・発表するとき、緊張しない。
- ・人数が少なく、静かで集中できる。
- ・勉強が進む。いつもと違う雰囲気勉強できる。
- ・いろいろなプリントで鍛えられる。

Q3. 「あまりよくない」、「よくない」と答えた人はどんな理由からですか。

(複数回答可)

	%
少ない人数で勉強するのは楽しくない。	1
発表しにくい。	2
分からないことを質問しにくい。	2
勉強が分かりにくい。	3

自分に合った勉強ができない。	3
落ち着いて勉強ができない。	2

その他の理由

・少し難しかった。

Q4. その他感想があったら書いてください。

- ・全員でやったときには、あまりあたらなかったけど、分かれてやったときは結構あたるし、集中できました。
- ・分数の計算はあまり好きではなかったけれど、しっかり勉強して前より分かるようになってよかった。
- ・楽しくて算数が好きになった。
- ・文章問題がずらずらと分かるようになった。
- ・自分で考える時間が増えてよかった。
- ・できればまたやってほしい。
- ・「トライ」は「じっくり」と違い、説明がすぐ終わってしまい、あまり文章問題が解けなかった。

ア 児童一人一人に目が行き届き、学習におけるつまずきが把握され、それに対応した指導ができた。

イ 少人数であることとほぼ同程度の学習集団であったため、児童も安心して自分の考えを发表或し、分からないことを質問したりするなど、学習に対する意欲の高まりが見られた。

(3) 教材・教具について

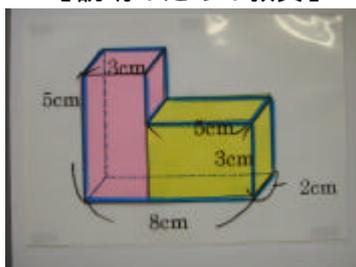
【具体物を用いた課題提示】



【自力解決時の支援コーナー】



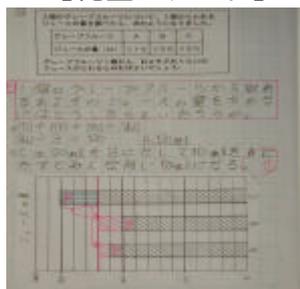
【説明のための教具】



【支援のための教具】



【児童のノート】



【児童の発表】

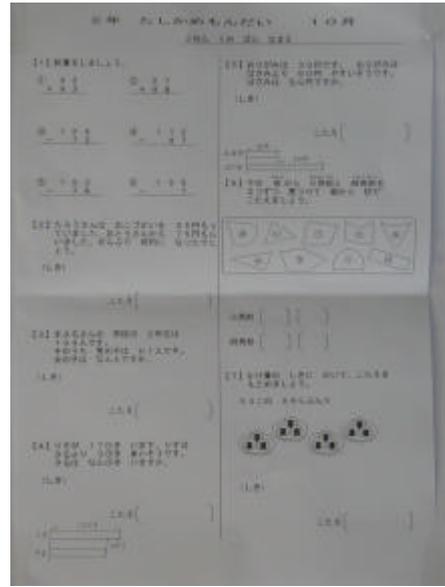
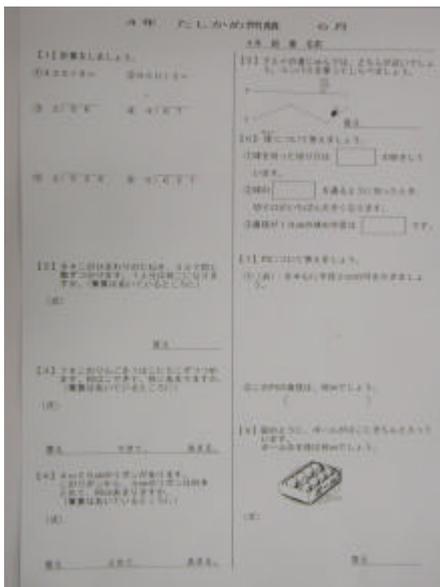


- ア 視覚に訴えるものや日常の生活に関連した課題を提示することにより、児童は問題場面をイメージすることができ、解決の見通しをもって自力解決することができた。
- イ 自力解決がなかなか進まない児童に対しては、具体物を操作させながら支援をすることができた。
- ウ 多様な解決方法ができるような教材を工夫することにより、ものの見方、考え方に少しずつ広がりが見られるようになってきた。
- エ 朝の学習（チャレンジタイム）で使用するプリントを各单元ごとに作成してファイルにまとめ、次年度以降に活用できるよう整備するようにした。

(4) 児童の実態把握と基礎・基本の定着について

月別たしかめ問題の実際

- 1 出題範囲 月ごとに学習した範囲から出題する。
- 2 問題作成 TT担当教諭が作成する。
- 3 事後処理 各小問ごとに各児童がどの問題が正答でどの問題が誤答だったかを一覧表にまとめる。
各学級、各学年の小問毎の正答率、全体の正答率を出し、およその傾向を把握する。
落ちていている部分については、朝の学習の時間（チャレンジタイム）などを活用し、取り立て指導をする。
2、3週間後に同じ問題を実施し、その後の変容を見る。



1回目の学年正答率	9.6	9.6	7.9	7.7	8.4	8.7	9.3	8.3	9.4	7.7		
全体	8.7	.1	7.2	7.1	8.2	7.8	9.9	9.8	9.9	9.6	9.3	8.7

1回目の傾向

【通過率のよかった項目】

- 繰り上がりのあるたし算筆算。(1回繰り上がり、2回繰り上がり)
- たし算になる文章問題の立式。
- ひき算になる文章問題の立式。
- 三角形、四角形を指摘する。
- 何個のいくつ分をかけ算の式に表す。

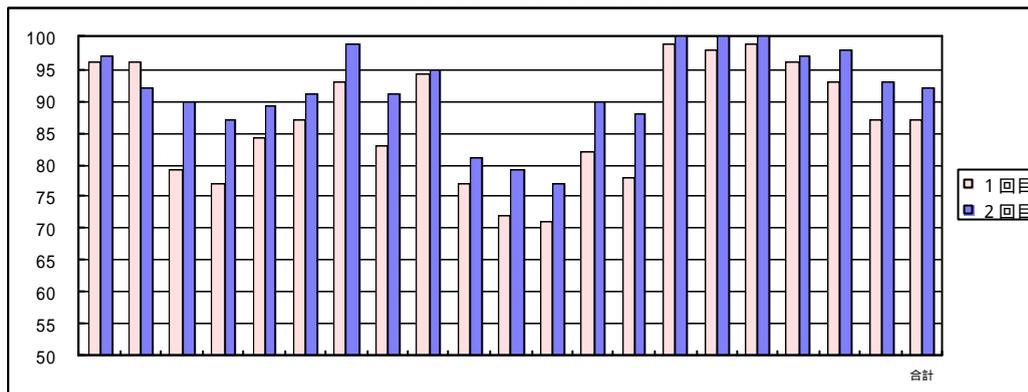
【指導を要する項目】

- 繰り下がりのあるひき算の筆算。
- EX) $104 - 72$ を22、 $112 - 47$ を55あるいは75、 $105 - 7$ を8とする誤答が多かった。

一の位のひき算はいいのだが、百の位から繰り下がった十の位のひき算の処理が十分でない。
ある基準から違いを考えて解く文章問題。
文章の読み取りから、引くのかたすのかの具体的な場面のイメージ化を図る必要がある。

2回目の学年正答率	97	92	90	87	89	91	99	91	95	81	
全体	91.9	79	77	90	88	100	100	100	97	98	93

1回目と2回目の比較



ア それぞれの児童がどの問題でつまづいているのかを把握できるとともに、指導の改善の資料とすることができた。

イ 結果をもとに朝の学習の時間（チャレンジタイム）などで、取り立て指導や個別指導をすることにより、基礎的・基本的な内容の定着を図ることができた。

(5) CRT 教研式標準学力検査の結果について

【A（十分満足）、C（努力を要する）の全国平均との割合の差（単位ポイント）】
〔同一の児童で比較している。EX）2年生の昨年は、1年生のときのデータ〕

		1年		2年		3年		4年		5年		6年	
		昨年	今年	昨年	今年	昨年	今年	昨年	今年	昨年	今年	昨年	今年
関心 意欲	A		13	5	5	2	2	5	6	3	-1	12	16
	C		-3	-3	0	0	-2	-2	2	-3	-1	-4	-2
数学的 考え方	A		9	-4	-3	8	10	11	15	15	15	-4	4
	C		-3	3	3	1	-9	-8	-6	-16	-17	8	-4
表現 処理	A		6	-3	1	-3	15	9	3	14	14	3	7
	C		-2	0	-2	-3	-6	-3	-3	-5	-6	-4	-5
知識 理解	A		4	5	6	7	11	7	8	8	16	8	1
	C		-3	4	-5	-4	-7	-5	-3	-2	-2	-1	2
総合	A		8	-9	-3	2	11	12	1	15	19	0	16
	C		-2	1	-4	-5	-7	-5	-5	-6	-8	-3	-2
	得点率		2	-4	0	1	7	5	4	7	7	1	2

学年によってばらつきはあるが、徐々にAの割合が高く、Cの割合が低くなっている傾向が見られる。

2. 今後の課題

- (1) 個に応じた指導方法・指導体制について
 - ア 今年度は4年生からのTT指導を実施してきたが、中学年から学び方を身につけさせ、興味・関心をもたせながら基礎・基本の定着を図るため、来年度は3年生からTT指導を実施する。
 - イ 習熟度別学習や課題別学習が効果的であると思われる単元を洗い出し、学級だけではなく、学年をオープンにした指導形態を工夫していく。
 - ウ 朝の学習の時間（チャレンジタイム）における指導の充実を図っていく。
 - エ 発展的な学習や補充的な学習の進め方を工夫するとともに、その指導における教材の開発をしていく。
- (2) 体験的な学習を通して、見通しをもって自力解決させるための単元構成・展開について
 - ア 児童が興味・関心や問題意識をもって取り組むことができるような教材の開発や展開の工夫をしていく。
 - イ 学習内容を確実に定着させていくための教具の開発や支援の仕方の改善を図っていく。
- (3) 互いの気づきや考えのよさを認め合い、進んで自分の考えを表現させることについて
 - ア 答えを導き出すことはできるが、その結論に至までの筋道立てた説明の仕方が十分でないので、いろいろな表現方法を示しながら表現力や思考力を高める指導をしていく。
 - イ 自己評価を活用したりノート指導を充実していくことにより、学びへの意欲を高めていく。
- (4) 中学校との連携による指導の連続性について

今年度は研究会があったため互いの授業参観をすることはできたが、来年度は定期的な会合をもち、児童生徒の実態や学習指導についての共通理解、連携を深めていく必要がある。

学力把握のための学校としての取り組み

1. CRT教研式標準学力検査（1月下旬実施：1・2年国語と算数、3年以上4教科）
2. NRT教研式標準学力検査（5月実施：2年以上算数のみ）
3. 月別確かめ問題
 - (1) 児童の実態把握と指導の重点の明確化
 - (2) 結果に基づいた、定着のための指導の改善

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1. 平成15年9月24日（水） 福井県春江町校長会学校訪問において概要説明
2. 平成16年9月下旬 東青管内小中学校校長研究協議会において概要説明予定
3. 平成16年11月上旬 公開研究発表会開催予定

~~~~~  
次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- |                     |                                                                                                       |                                                                                            |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 【新規校・継続校】           | <input checked="" type="checkbox"/> 15年度からの新規校                                                        | <input type="checkbox"/> 14年度からの継続校                                                        |
| 【学校規模】              | <input type="checkbox"/> 6学級以下<br><input type="checkbox"/> 13～18学級<br><input type="checkbox"/> 25学級以上 | <input checked="" type="checkbox"/> 7～12学級<br><input type="checkbox"/> 19～24学級             |
| 【指導体制】              | <input checked="" type="checkbox"/> 少人数指導<br>一部教科担任制                                                  | <input checked="" type="checkbox"/> T・Tによる指導<br>その他                                        |
| 【研究教科】              | <input type="checkbox"/> 国語<br><input type="checkbox"/> 生活<br><input type="checkbox"/> 体育             | <input type="checkbox"/> 社会<br><input type="checkbox"/> 音楽<br><input type="checkbox"/> その他 |
| 【指導法の工夫改善に関わる加配の有無】 | <input checked="" type="checkbox"/> 有り                                                                | <input type="checkbox"/> 無                                                                 |